

板金・金物工事業

職人のサラリーマン化による長期発展を志向

7-7 株式会社ライムイシモト

職人のサラリーマン化を進める企業

株式会社ライムイシモトは、長崎県諫早市に本社を構える建築工事やリフォーム工事を営む企業である。

同社は1934年（昭和9年）に石本板金工業として創業した。その後いくつかの社名変更があり、1997年（平成9年）、現在の株式会社ライムイシモトに変更された。

同社は、創業以来職人を常用雇用し、社員として迎え入れてきた。重視しているのは「職人のサラリーマン化」である。建設業では職人は日給で働くことが多く、社会的地位も低く見られがちであった。そこで、代表取締役会長の石本氏は、月給を払い、社会保険等の諸制度にもきっちり加入し、手当等も整備していった。会社の第一線の重要な戦力である職人を理念だけでなく実際に大切にすることで成長している企業である。



代表取締役会長の
石本氏

全員資格者化による全行程のクオリティが向上

同社は技能検定を非常に重視しており、職人だけでなく営業や事務スタッフも全てが有資格者である。

石本会長は、「弊社は提案から受注、施工、アフターサービスまでを一貫して担っており、この一連のプロセスには様々な工程・価値の連鎖があります。一度の受注だけでなくリピートにつなげるためには全てのプロセスを一定以上のクオリティに保たなければなりません。これを支える基盤が技能検定なんです。」と言う。技能検定は、一連の工程・価値連鎖のクオリティを上げるために重要な手段の1つとして位置付けられている。石本会長はまた、全ての工程・価値連鎖のプロセスはプロによって担われなければならないと考えており、技能検定はプロとしての自覚を持たせるための手段としても位置付けられている。

社員がプロとしての自覚を持つ

同社の社員は全員が技能士である。全ての部門の全ての社員が有資格者としてプロの仕事を求められる。石本会長は、「全社員が技能検定に合格することで、『合格者にふさわしい仕事をしなければならない』という良い意味でのプレッシャーが各社員に生じています。」と言う。各社員がプロとしての自覚を持って仕事をする事ができおり、同社では工事等における事故がほとんど起こらない。また、顧客から見ると、全員が技能士である同社は安心して仕事を発注できる高度に武装された企業に映る。このため受注やリピートにつながりやすい。



技能士の処遇向上にも尽力

同社では、入社した社員には受検資格が得られればすぐに受検させている。学科は自習させ、実技は先輩の有資格社員が業務終了後に教えている。また、新しい工法の習得や今までの技能のカイゼンのための技能勉強会を月に数回開催しており、技能検定受検及び合格後に技能に磨きをかける場として有効に機能している。また、職人の意識、モチベーションを高めるために技能検定を活用し、2級を取得すると月8千円、1級で1.5万円の手当を出している。

石本会長は、今後の展望として、特に若い世代に対して「職人になるとホワイトカラーよりも高いサラリーが得られると示したいと思っています。ドイツではマイスターの給料や社会的地位は医者と同じかそれ以上なんです。」と言う。職人の社会的地位を上げるための活動を今後も継続していきたいと考えている。

株式会社ライムイシモト

- 業種：板金・金物工事業
- 住所：長崎県諫早市貝津町
- 代表者：石本 潤治郎
- 設立：昭和46年
- 従業員：40名
- 技能士：35名（延べ46名）

技能士へのインタビュー

吉田 敏弘氏 (50 歳)

1級建築板金技能士・登録建築板金基幹技能者
平成 14 年建設マスター(建築板金)

小さい頃から職人に興味

株式会社ライムイシモトには、国土交通省の建設マスター顕彰(建築板金)を受けている社員が 3 人いる。吉田氏はそのうちの 1 人である。

吉田氏は、高校卒業後すぐに同社に入社した。出身高校は農業高校であったが、小さいころから近所で建築、大工仕事をしている職人を見て育ったこともあり、建築関係の仕事には興味があった。

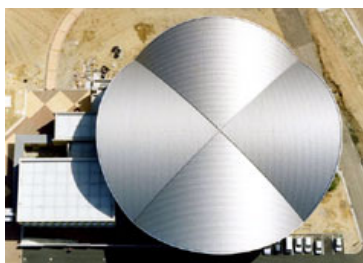
入社してすぐの時期は、工事現場で仕事を覚え、3 年目には建築板金技能検定の 2 級に、5 年目に 1 級に合格した。このほかにも工事の施工関連の資格を複数持っている。

自分の作品が名所として残ることに誇り

建設マスターとして高度な技能を日々発揮している吉田氏に、技能の魅力について迫った。

「自分が作ったものが後々残っていること、長く残るものが作れることが魅力です。特に大きい建造物に自分が携わる場合は、自分が亡くなっても多くの人の目に触れる形で残るので、そのこと自体が自分にとっての誇りになっているんです」と言う。今では長崎県の観光名所の 1 つであるシーボルト大学体育館の屋根建築の際の模型を作ったのは吉田氏である。模型作成には 2 ヶ月を要した。その後模型を踏まえて行われた建築も、責任者として完成に導いた。

一方で吉田氏は「納得のいくものを作れたという実感はまだないですね。職人として『限りなき挑戦をしたい』という思いがあるからです。自分が納得できなければ、顧客が納得していても納得はできないはずがありません。」と言う。このような考えは吉田氏



シーボルト大学体育館(屋根工事)

だけでなく、会社全体の風土にもなっている。

資格は技能と考えのバランスを取るために有効

吉田氏にとっての技能検定受検の良かった点は、「基礎的な技能がなければいい仕事はできません。考えがあっても技能がついていかない場合には、いい仕事はできないんです。逆に技能があっても考えがなければ仕事の内容や質は発展しないと思っています。技能検定は技能と考えのバランスを取るためには非常に有効です」と言う。また、「技能検定に合格することによって自分の考えや技能に対する自信がつきます。難しい現場にも、技能検定があるからこそ配置され、配置されることによってさらに自分を成長させることができるんです」と言う。

吉田氏にとって技能検定は、考え方と技能という、理論と実践を融合させるための手段として有効に機能しているようだ。



東平尾公園球戯場(屋根工事)

究極の目標は人間国宝

吉田氏は、「技能をさらに蓄積し、向上させていきたいですね。日々の鍛錬を継続し、進化させていきたいと思っています」と言う。現在はマスター顕彰を得ているが、究極の目標は人間国宝だ。人間国宝までの道のりは遠いと語るが、日々技能を進化させることでいつの日か人間国宝となることを見据えている。

自分自身に対する目標だけでなく、後進の指導も重視している。「どのレベルの社員にどのレベルの指導をすればうまく成長してくれるのかの見極めが難しいですね。背伸びさせ過ぎてもいけないので」と言うが、吉田氏が慕って教を請う後輩社員は多いという。

人間国宝を目指す自分に厳しい顔と、後輩を導く暖かい指導者としての顔の両方を覗かせる吉田氏が活躍する同社は、今後の発展が約束されているように感じさせる。